

石川県古民家調査報告 其の1

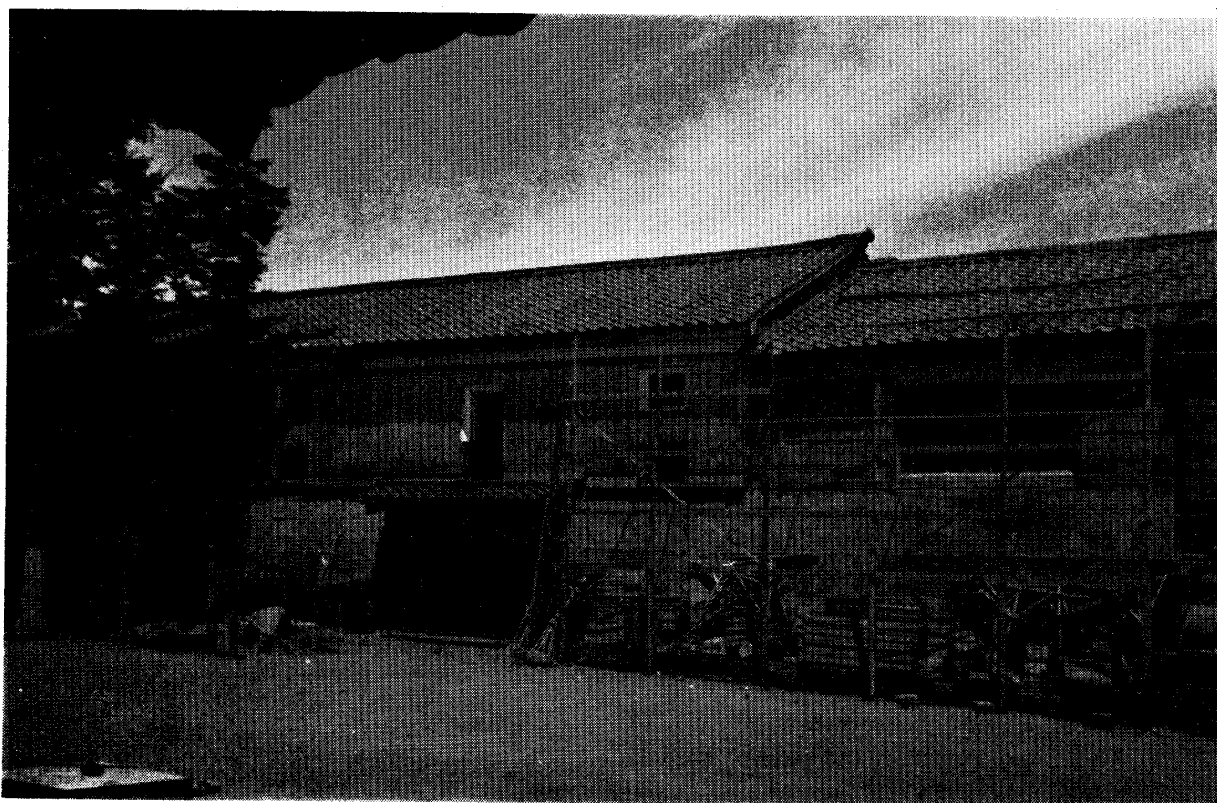
輪島、鳳至町、旧中島屋

(石川県古民家調査)

由 良 滋

輪島の町造りは藩政時代に入り益々進められ完成されていった。輪島は鳳至町と河井町からなる農村として幕末まで栄え、両町は互にライバルであったようだ。この町は不幸にも数回の火災に会い、又津波の被害もあり古建築も少なく往時の姿が見られないのは残念である。特に河井町は明治末期に大火にあい、そのほとんどが焼失してしまった。而し鳳至町にはまだ藩政時代の建物が幸い見られる。

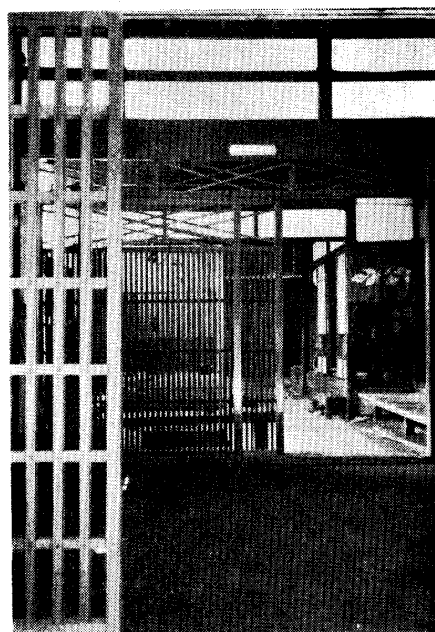
こんどの報告はその中から上級階級の町家として現存する旧中島三郎左衛門邸を選び調査したものである。





正面・旧中島屋はこの二軒からなる

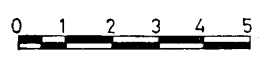
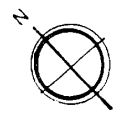
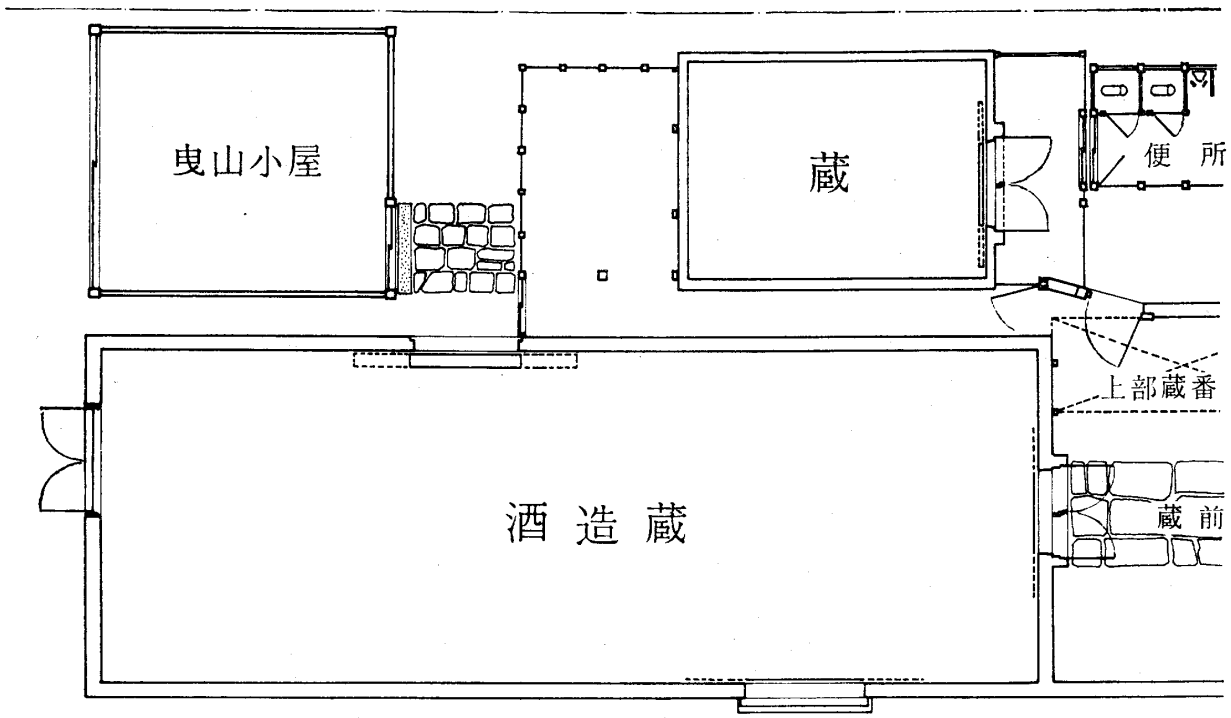
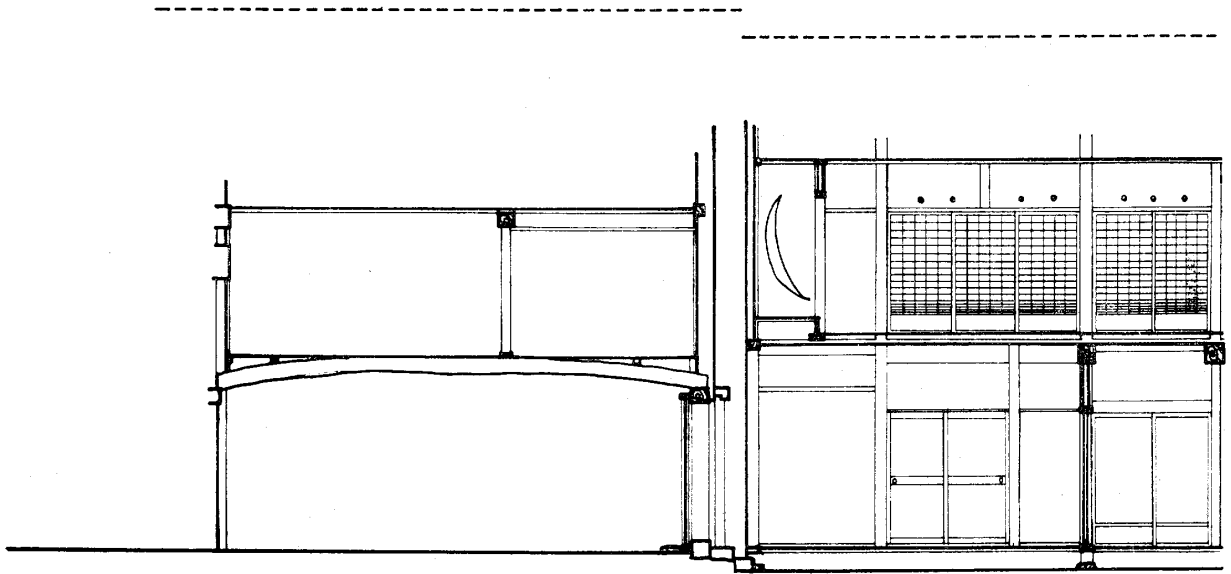
中島屋は鳳至町代々の旧家で、安永年間に書かれた雑能登路記に次の様な中島屋の歴史れが紹介されてある。「昔は鳳至町は10町ばかり川上に数百軒有て奥郡府中にて有り。水難兵乱に分



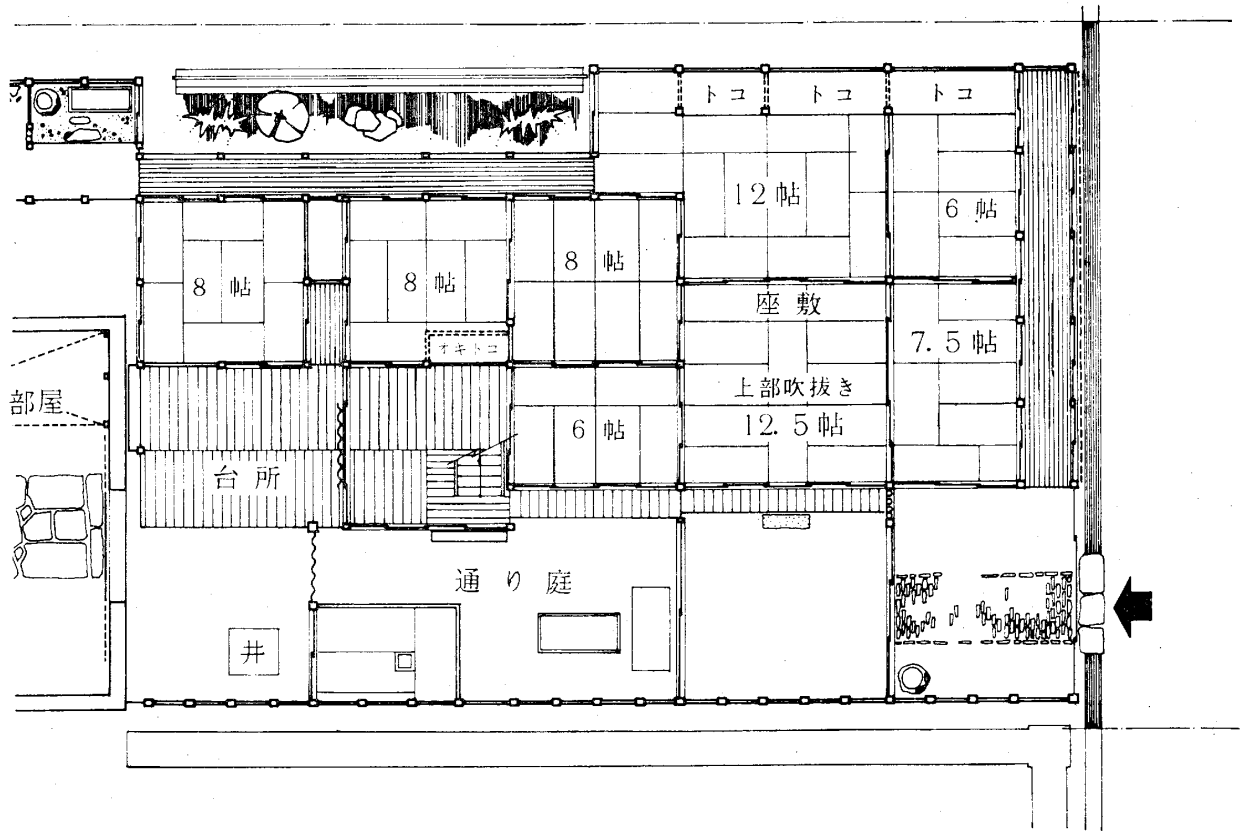
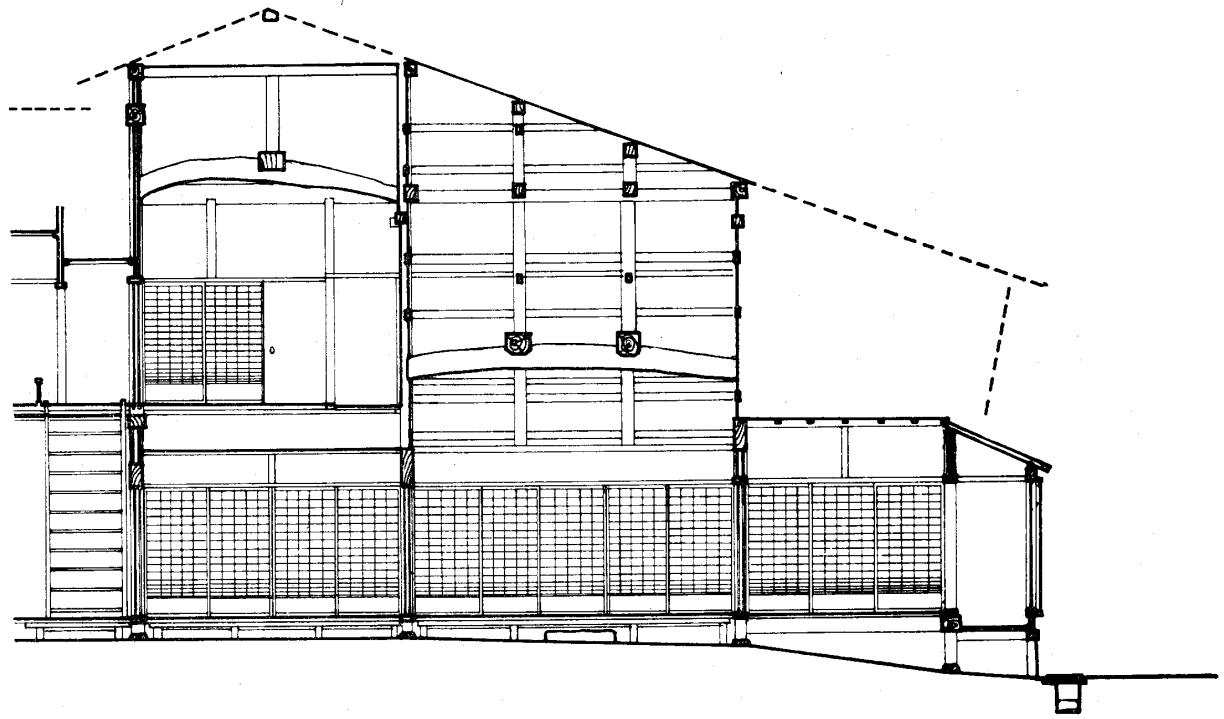
通り庭・この奥に酒蔵がある



南側外観 左から酒造倉蔵前2階部分ルーバー状の庇のある大窓，正面道路と続く

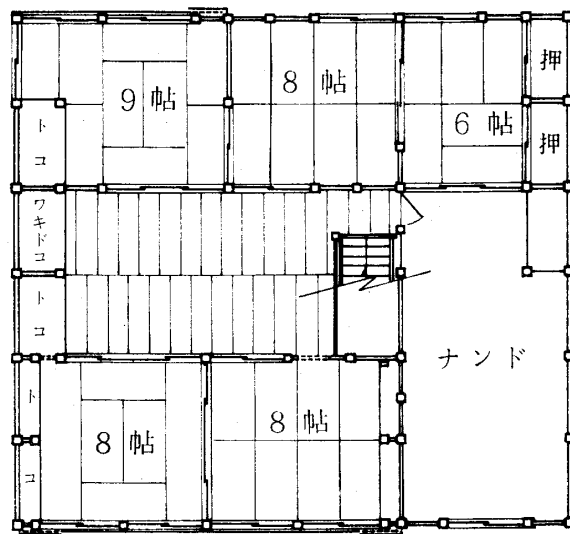


SCALE 1:100



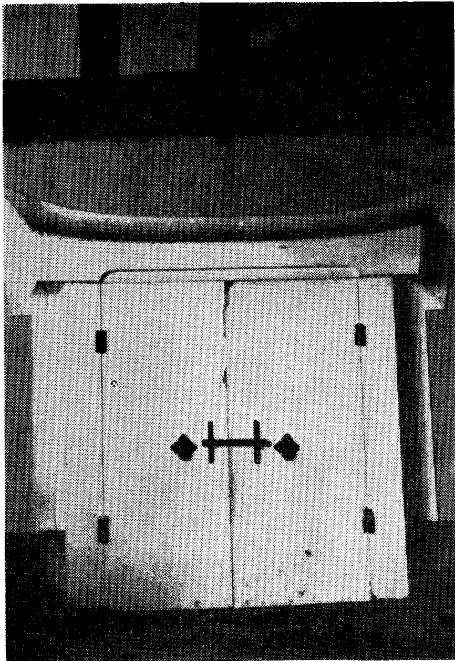


1 階 大 広 間



2 階 平 面

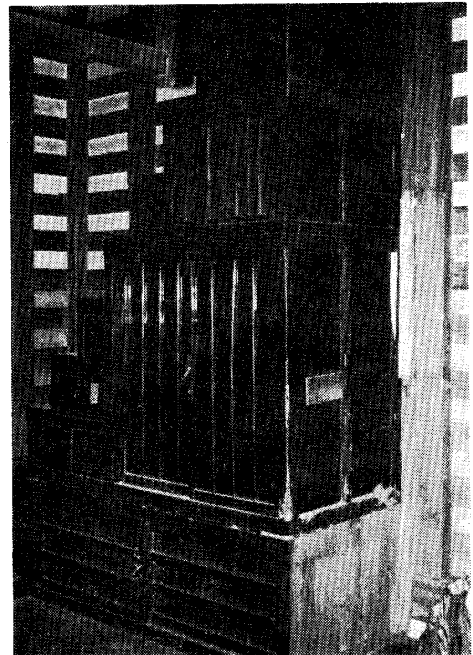
散して鳳至川，河原田川の中島に來りて，今の中島屋，中上屋林根元のものなり云々」此の事から中島屋は町の創建から幕末までこの町と共に栄えた代表者の一人であり，職業は蔵宿（地頭の収納する年貢米をあずかり，余剰は相場の上下を測り売り，その手数料を収める事を業とする。又家政の不如意なる諸士に対して，将来の収納米を抵当として，金融の便を講ずることを副業としていた。）質屋，酒造業，そして不在不耕作の大地主で輪島一と云われた素封家であった。天保14年の記録に鳳至町で酒造業，蔵宿を営んでいたのは中島屋唯一であったようでその経済力の程が分る。又，時々組合頭も務め，藩から3人扶持



酒造蔵扉

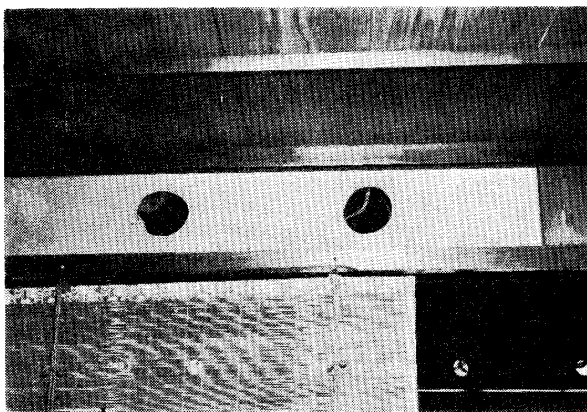


大広間と通り庭との境の紙障子



箱階段

現在は蔵の内で使用されてあるが，かつては最下段を除き座敷から2階へ上る箱階段として使用されたものであろう



2階爛間・輪切にした竹筒を塗り込んだもの

(1人扶持は1日5合相当の食禄) を受けておったことから社会的にも認められた地位であった。この様に身分は農民であっても商家としての機能をもち輪島の上流社会層の一人として活躍した事が予見できる。而し明治に入り日本の封建社会の解体と共に中島屋は突然輪島から姿を消し、いずくともなく没落してしまった。

この建物は通り庭形式の町家造りで東側の道路に面した細い2軒から構成される。明治に入り、右側は正角氏宅、左側は二代、人の手に移り変わり現在は隣地住吉神社の所有で浅井氏の住ひと集会所として使用されており、裏庭には往時、7つの蔵があったと言われる。現在は見事な倉が3つと酒造蔵が残っている。この左右2軒の相違は特に通り庭の形式で、右側のものは普通の2m余のものだが左側のものは5m近くある広いものになっている。多分広い方は商店として公けのものに使用され、右側は住ひとして使用されたものであろう。今回の調査は左側のみで後日右側を調査する予定である。この家の建設時期は不明だが、輪島町史年表によると天明5年(1785)鳳至町大火、232軒焼失この時住吉神社名木笠松焼失(当時戸数は約255軒)この記録からこれより以前とは考えられぬ。又その後文久3年にも火災の記録がある。而し藩政時代の幕末の町家造りの姿を現在も止めている。特に1階の大広間は見事でありかつては村の寄合いに使用された事であろう。2階は小さな室に分割された形式で、使用人、客室、等主に寝室に当てられたものであろう。細部の意匠では、2階の竹を輪切にして壁に塗りこんだ数寄屋風の爛間とか、神社に面した入口脇の大きな窓の外側に取付けたルーバー形式の庇等、機能美を生かした造形が見られる。

以上報告であるが、これは石川県古民家調査のシリーズの一つとして五井孝夫先生の御指導によるものである。尚調査に当り古今伸一先生、輪島市観光課、浅井氏、正角氏、輪島の方々の御世話に対し深く感謝致します。

参考文献 輪島町史
加能郷土解彙(日置謙編)